サイコシンセシスの教師論的意義

ふじ もと ひさ お
藤 本 久 夫

はじめに

現代は教師受難の時代といわれる。学校によっては教師は校内暴力、授業妨害、いじめ、不登校などへの対処に追われ、授業に集中すべきエネルギーのみならず、教育への情熱まで奪われかねない状況がある。また、教師の中には精神的疲労のために心身の疾患に陥る者がおり、その数は増加の傾向にある^[E1]。

このような学校教育の病理的現象を克服するために、教育制度、教育内容、教育方法などの改革が必要であるが、本稿では教師と生徒との関係が重要であると考え、教師自身のあり方を考察することにした。その際、サイコシンセシス(psychosynthesis)の理論を教師論として応用することを試みた。

サイコシンセシスとは、フロイドのサイコアナリシス(ps psychoanalysis)に対して、人間の精神統合の理論としてR.アサジョーリ(R. Assagioli, 1888~1974)が提唱したものである。それは精神療法の理論であるが、また、人間の健康な精神発達のための理論でもある。彼はサイコシンセシスの人間の精神発達に果たす役割について以下のことを述べている。

「それは自分自身の内的な幻影や外部からの影響の奴隷であり続けることを拒否する人々、また自分自身の内に湧き起こってくる様々な心理的力動によって受動的にもてあそばされることを拒否する人々、そして自分自身の人生の主人公となるべく決意を固めた人々

のための心理的啓発、……及び本人が自分の真のトランスパーソナルな特性を発見し、認識し、またその導きのもとで、調和のとれた、輝かしくも有能なパーソナリティーを築き上げていくことを支援するための総合的な教育法である。」^[1]

ここでアサジョーリはサイコシンセシスをパーソナルな次元のサイコシンセシスとトランスパーソナルな次元のサイコシンセシスとに分けている。前者は個人的な自己の統合、自己の実現ということであるが、後者は個人的自己を超えた高次の自己の実現を意味する。

以下、サイコシンセシスを教師論の観点から考察し、その有効性を検討することにする。

1. パーソナルサイコシンセシスと教師

1.1 自己意識

人間の意識の中心は自己意識であるということは、認められてよいであろう。この自己意識とは、「私」は「私」であるという自己への気づきである。これは自己同一性への気づきと言われる。それはいかなる高等動物も持たない、人間だけが持つ高度な意識である。アサジョーリは「私」という自己意識を明瞭に持つために、次の事実を自覚することが必要であると言う。それは「私は身体を持っている。しかし私は身体ではない。」「私は感情を持っている。しかし私は感情ではない。」「私は知性を持っている。しかし私は知性で

はない。』²⁾ということである。

ところで、子どもの時の「私」と大人である「私」とは同一の「私」であり、その意味で自己は時間、空間を超えて不変であると考えられる。そして自己意識は意識領域における可変内容、すなわちその時々の欲望、感覚、感情、思考などの意識内容とは異なる。自己は欲望でも感情でも知性でもなく、それらを支配し、統合する主体なのである。

アサジョーリは、「私たちは自己同一化しているすべてのものに支配される。私達は自分が脱同一化するすべてのものを支配し、コントロールすることができる」³⁾と言う。つまり、もし自己が欲望と同一化するなら、それに支配され、欲求衝動に駆られた行動をするであろう。もし自己が感情と同一化するなら、自己はまったく感情に左右されてしまう。もし知性に同一化するなら、その人は知性のみで判断し、行動する人間になり得る。それゆえ精神的にバランスのとれた、安定した人格となるためには、自己が欲望や感情や知性から一度脱同一化し、「私」と言う純粋な自己意識を持ち、自己がそれらを支配し、調整し、コントロールすることができなければならない。

アサジョーリは、人間の精神諸機能の中核となるものは意志であり、意志の中心に自己を位置付けている。つまり、私は意志を持つとも言えるが、同時に私は意志であるとも言えるという。なぜなら、私は意志によって他の精神諸機能を調整し、統合し、方向付け、自己の行為を決定するからである。すなわち、意志は人格の中心的機能を果たす役割を持つと言うのである。

このように、彼は人間の精神の中で意志を特に重要なものとして考えている。また、彼は意志の働きを、従来考えられてきたように、単に欲望や感情を抑制する力、あるいは何かをすべきでない、何かをすべきである、といった禁止や義務の意識作用としてよりも、私

は何かをする、私は何かをすることができる、といった物事を遂行していく積極的な精神作用として考える。故に人間は意志によって主体的に自己を生きることができるのであり、自己自身を主人公として生きることができるというのである。

このように、意志およびその中心の自己を、パーソナリティーの中核に位置付けて考える人間観は、教師のあり方を考える上で、いくつかの点で有意義であると思われる。

1.2 自己統合

教師が意志によって自己を統合し、精神的にバランスの取れた、安定した人格であることは、生徒の精神状態をも安定させることにもつながるであろう。逆に、教師が自己統合できず、些細なことで感情的になったり、その時々で気分が生徒への態度が変わったりすると、それは生徒の精神状態にマイナスの影響を及ぼしかねない。生徒は教師との関係から自ずと教師の精神状態に敏感であり、それは生徒が年少であればあるほど微妙に影響を与えると思われるのである。

また、自己を統合することは、教師が感情や知性に支配されず、したがってそのどちらにも偏らずに、物事を正しく判断するためにも必要なことである。特に、日々、様々な生徒に接し、その都度的確な判断を要求される教師にとって、このことは大切なことであろう。ちょっとした生徒への誤った判断が、大きな問題に発展しかねないからである。

自己統合は、一般的に自分の中にあるエネルギーを結集して、物事を効率的、生産的に成し遂げるためにも必要なことである。特に教師が、本来の仕事である授業を、生徒にとって実りあるものにするために、それは必要であると思われる。よく準備された充実した授業をすることによって、教師はまた自信を持って次の授業に臨むことができるであろう。逆もまた真なのである。

1.3 自己確立

自己確立は、パーソナルサイコシンセシスの主要な課題である。私は私であるという自覚を持つことによって人間は、環境や特に他人によって支配されずに、主体的、能動的に生きることができるのである。

生徒が自己を確立することは教育の1つの重要な目標である。そのためには、まず教師自身が明確な自己意識を持ち、強い意志を持って自己を律することができるしなければならないであろう。アサジョーリの弟子であるD. ホイットモアは、「教師は子どもが学ぶモデルとならざるを得ない。子ども達ははっきりと指導されなくても模倣によって知らず知らずのうちに学ぶことが多いのである。成熟した自己主張、忍耐強さ、進んで危険を冒すこと、過ちを認める正直さや勇気、自己規制など。」⁴⁾ このように生徒は教師から人格的に多大な影響を受けるのであり、したがって生徒の自己確立を促すために、教師が自己確立することが必要である。

ところで、自律した、強い意志を持った教師にありがちな、教師の権威で生徒を支配すること、あるいは強制することは十分に注意をしなければならないであろう。教師が生徒の人格を認め、生徒一人ひとりの意志を尊重し、その意見を聞くことは大切である。そうすることによって生徒の自主性や主体性を育てることになるのである。しかしその際、教師は自分の信念と意見を持ち、安易な妥協はせず、必要な場合には毅然とした態度で生徒に臨むことは重要なことである。教師はあくまでも自己自身でなければならないのであり、そのことが生徒の信頼を得ることにもなるのである。

1.4 真の自己

私たちは何らかの社会的な役割を持って生きている。それは職業におけるものや家庭でのものである。しかしそれぞれの役割は私の

サブパーソナリティーに過ぎない。このサブパーソナリティーに同一化するとその役割に支配され、その結果、本当の自己を失ってしまう恐れがある。それゆえ、時に自分のサブパーソナリティーから脱同一化することによって、真の自己を取り戻し、ありのままの自分を見いだすことが必要なのである。

このことは、特に教師のあり方を考えるとき、大切な問題を含んでいると思われる。とかく教師は教師というサブパーソナリティーに同一化し、人間としてよりも教師としてのみ生徒に接することになりがちである。J.ミラーは、「実存主義者達が教師に思い起こさせるのは、教師という役割の背後に、逃げ隠れはできないこと、自分は教師である前に何よりもまず人間であること、傷つきやすく、しかも主体性を持った開かれた人間であることである」⁵⁾と述べている。教師がその役割以前の本来の自分に生き、生徒に心を開くことによって、生徒との自然な心の通い合いが可能になるのである。そのことの教育的意義は大きいと思われる。

またC.ロジャースは、教師と生徒との関係が、生徒の学習効果にも影響することを指摘している。「促進者(教師)は表面を装ったり仮面をかぶったりすることなく、現にあるがままの真実な人間であるとき、非常に効果的なようである。このことは促進者が人間対人間という基盤に立ちながら、学習者と個人的に直接出会うようになることを意味している。」⁶⁾

教師が単に知識や技術を教えるだけの存在、また生徒を管理し、指導するだけの存在であり、常に真実の自己を出さないようであれば、そこに人格としての生徒との出会いはないであろう。教師と生徒との結びつきは教育の前提であり、また、教育を効果あらしめる条件でもあるのである。教育における教師と生徒との友愛の意義について、J.ギュスドルフは次のように強調する。「教育という使命は友

愛の使命であり、この使命を自覚していないような教師は、自分の生徒たちのそばにいても、恐らく生徒たちの間に何の反響も見出すことはないだろう。彼の勉学上の活動の結果すら、彼には愛情が欠けているということをはっきり示すことだろう。』⁷⁾ 生徒たちの学校や教師に対する不満の中に、人間としての教師に出会えないということがあるのではないかと思われる。

しかしながら、教師本来の役割は、生徒を指導することであるということは忘れられてはならないであろう。教師と生徒との関係が、単なる友情関係に陥る危険にも注意しなければならないのである。したがって、教育関係は指導的関係と人格的関係の二重の関係から成り立つものであるということ、教師は認識し、自覚することが大切である。

2. トランスパーソナルサイコシンセシスと教師

2.1 高次の自己

人間の意識は、経験や思考によって絶えず変化していくものであるが、場合によっては意識の次元の変容が生じることがある。アサジョーリは、人間の意識には欲求、感覚、感情、思考などの直接気づいている意識の部分以外に、それを超えた高次の意識の領域があるという。前者はパーソナル(個人的)な意識の領域であり、後者はトランスパーソナル(超個人的)な意識の領域である。彼はこのトランスパーソナルな意識領域について次のように述べている。「私たちの感じる高次の直感やインスピレーションの数々——芸術的、哲学的、あるいは科学的、倫理的命令及び人道的あるいは英雄的行動へと駆りたてる衝動などは、この部分から送られてくる。この領域は利他的な愛などの高次元の感情や、天賦の才、観想や啓示あるいは恍惚状態などの源泉である。』⁸⁾ このトランスパーソナルな意識を懐かせる人格の中心となるものが彼によれ

ばトランスパーソナル・セルフなのであり、それは自己より上位にある高次の自己なのである。

この高次の自己によって到達したトランスパーソナルな意識状態について、彼は次のように説明している。「この意識状態は喜びと穏やかさ、内的な安心感、静かで落ち着いた力強さの感覚、明解な理解、光り輝く愛によって特徴づけられている。この意識状態における最も高い側面は、理想的に言えば、生命の根源の実現であり、宇宙の大なる生命とのふれあい、そしてそれとの同一化であるといえるだろう。』⁹⁾

このような意識状態は、人間性心理学者と言われるマスローが「至高体験」と称したものと同一である。彼はいわゆる欲求階層説において、人間は生理的、心理的、社会的欲求および自己実現の欲求を充足することによって、社会に十分に適應できる、有能で、精神的に健康な人間になることができると説いた。しかし後年、彼は、それはパーソナル・セルフの欲求の充足であって、人間はそれだけでは真に精神的満足を得られず、または実存的空虚感を感じることがある。人間はそれを超えた高次の自己の欲求、すなわちトランスパーソナル・セルフの欲求を持つ存在であり、「至高体験」はこの高次の欲求によるものであるとした。

ここで注意すべきことは、人格の中に実体として2つの自己が存在するわけではなく、実在する1つの自己が次元の異なる意識内容を懐くということである。アサジョーリは「パーソナルな意識をトランスパーソナルの意識領域にまで拡大すること……そして低次の領域をトランスパーソナル・セルフと統合すること」¹⁰⁾ がサイコシンセシスの目標であると述べている。換言すればサイコシンセシスの目標は、トランスパーソナルサイコシンセシスなのであって、それはパーソナルサイコシンセシスを前提とし、それを包含するこ

とによって可能であるということである。

トランスパーソナル・セルフの体験からくる意識の特徴について、アサジョーリの弟子であるP.フェルッチは次のように述べている。「私たちの通常の自己感覚は境界、執着、所有、競争、死への不安などの上に築かれているが、トランスパーソナル・セルフには、存在の純粋な気づきと、全てのものとの一体感に基づく自己感覚がある。その本質は時代や文化的条件を超えて、すべての束縛から自由な意識である。そこから、愛、平安、喜び、強さのような、より高い特性が輝き出る。」¹¹⁾すなわちその特徴は、自我への執着からの解放感とすべての存在とのつながりという感覚と意識であり、また、そこから生じる生への喜び、およびすべての生けるものへの愛の感情である。

以下、このようなトランスパーソナルな意識について明らかにしながら、その教育的意義を考察する。

2.2 すべてのものとのつながりの意識

インドの思想家、宗教家であるJ.クリシュナムーティは、瞑想を通して宇宙存在と一体化した意識状態について次のように記している。「私は自分自身から離れてしまった。私はあらゆるものの中にいるのです、というよりもあらゆるものが私の中にあるのです。無生物も生物も、山や虫や呼吸している全てのものが、私の中にあるのです。」¹²⁾このようにトランスパーソナル・セルフは個人と宇宙存在とを結びつけるインターフェイスなのである。そして私たちは各人トランスパーソナル・セルフを持っているのであり、それゆえすべてのものとのつながりの意識を懐くことはできる筈なのである。ホイットモアは、「私たちは、人々や物事を表面的にしか見ないで、自分とは別なのだ、自分とは違うのだと見なす習慣がある。私たちは、自分が基本

的には他人から分離しているということを経験する。しかしトランスパーソナルな次元との接触は、一様に全ての存在との連帯感や自分がより大きな全体の一部であるという感覚をもたらす。」¹³⁾と述べる。

このように人間はすべてのものとのつながり合っているという考えは、現在、教育界に影響を与えているホリスティック教育思想と深く関係している。ホリスティック教育の理論家であるJ.ミラーは、「ホリスティック教育の哲学的基礎は……万物が相互に依存し合ったこの宇宙の中で、生きとし生けるものが互いにつながり合い、結びついているということである。」¹⁴⁾と述べている。

現代の自然科学教育の目標を、暗黙のうちに自然を対象化し、分析し、自然を利用することに置いているとすれば、それは私たちがパーソナルな次元の知性に同一化しているということである。それに対して人間は自然の中で生かされ、自然とともに生きるという思想はトランスパーソナルな意識によるものであると言えよう。

教師が自分を含めて、すべてのものとのつながりのうちに生きているということを実存的に実感し、そのことを生徒にも伝えていくことは、知識としてのエコロジー教育とともに大切なことであろう。自然破壊による地球の痛みを、自分の痛みと感じるほどに、感性を豊かに養うことは、21世紀の教育に必要なことである。また、そのことから生じる、生きとし生けるものの生命を大切にしなければならないという思想は、今日の平和教育の前提として考えられるべきことである。

2.3 生きる価値

人生は生きるに値するものであるかという問題は、人間にとって大きな問題である。特に現代、20歳代の青年の死因のトップが自殺である^{註2)}ということを見ると、これは教育上見過ごすことのできない問題である。サ

イコシンセシスの立場から、この問題はどのように考えられるのであろうか。

先述したように、トランスパーソナル・セルフの体験の特徴は、自我への執着からの解放感であり、心の平安と生の喜びである。このような意識体験およびそれから齎される思想は、人間の生きる価値や、生きる意義について、積極的な示唆を与える。マスローはこのことについて次のように述べている。「至高経験は、それ自身の内属的価値を持っているので、自らを確認し、自らを正当化する契機として感じられる。……至高経験は、人生が生きるに値するものだというを証明する。」¹⁵⁾ すなわち、トランスパーソナル・セルフの体験それ自体が、生きることは良いことであり、価値のあることであるということをおしなすというのである。子どもの誕生の喜び、自然の美しさへの感動、人間相互の愛の体験、生きること自体への感謝などはその例である。

現代、生きる希望が持てず、無気力、無感動、無関心な、生きる意欲に乏しい若者、また他人の命や、自分の命まで蔑ろにする若者が増えているように思われる。教師がそれのことばで批判したり、説教をしても効果は期待できないであろう。教師自身が生きる喜びと感動、生かされていることへの感謝の気持ちなどを、体験的に伝えることが必要なのである。

クリシュナムーティの次のことばは、現代の教師のあり方に1つの示唆を与えるように思われる。「美しいものへの愛は詩歌、微笑、沈黙の中に現れるだろう。だが、私たちの大多数は沈黙することを知らない。私たちは自我の追求や、享楽にあまり忙しいので、空を渡る鳥や、漂う雲を觀賞するゆとりがない。……私たちが子どもの心の中に豊かな心情の芽を蒔こうとするなら、私たち自らが豊かな感受性を見えなければならぬ。そして人間の心の美しさも、自然の美しさも、子どもと

一緒に驚嘆しつづいていかなければならぬ。」¹⁶⁾ 教師がパーソナルな現実世界に止まらず、トランスパーソナルの世界にも入っていくことにより、生徒のトランスパーソナル・セルフを目覚めさせることが必要なのである。それによって生徒に、生を肯定し、世界を肯定する人生観を懐かせることができるようになると思える。

2.4 人間愛

先述したように、トランスパーソナルの意識は、自然、人間、宇宙のすべてのものとながかり合い、結びついているという意識である。結びついているということは、人間の精神としては愛の働きによるのである。それは「人間の内的な核心は愛」¹⁷⁾ だからである。パーソナル・セルフの中心的な働きが意志であるのに対し、トランスパーソナル・セルフの中心的な働きは愛なのである。ここでは特に、それを人間相互の関係の問題として考察し、また教育関係の問題として考えていく。

20世紀の思想界に大きな影響を及ぼした哲学者M.ブーバーは、人間と人間の関係には2つの異質の関係があることを指摘した。1つは「我とそれ」の関係であり、他の1つは「我と汝」の関係である。前者は人間が人間を物象化し、利用したり、支配する対象として見る関係である。そこには人間相互の人格的結びつきはないのである。後者は人間が他者を自由な主体として認め、心を開いて他者を受け入れ、人格的に交わる関係である。そこには人間相互の真の結びつきがある。前者はパーソナルな意識の世界の問題であり、後者はトランスパーソナルな意識の世界の問題と言えるであろう。

人間は一人ひとり、様々な欲求、感情、思考、価値観を持っているが、それらの違いを認めながらも、あるいはそれらの対立、葛藤を超えて、魂においてつながり合うことの可能性を持つ存在である。それは私たちのトラ

ンスパーソナル・セルフの意識と意志によって可能になるのである。そこに人間同士の対話的關係を作り出すことができるのである。

このような人間相互の結びつき、あるいは対話的關係は、特に教師と生徒との關係において重要である。ブーバーは、「教育關係は嚴然たる対話的關係である」¹⁸⁾と言い、教師と生徒との心のつながりの大切さを強調する。それは教育が成り立つための必要条件でもある。何故なら教師と生徒との間に亀裂があるとき、教育は不可能になるからである。

ところで、教師が生徒と対話的關係にあるという時、すでに述べたように、教育關係が指導的關係でもあるということから、それは完全に相互的なものではない。すなわち教師は生徒の立場に立って、今生徒は何を感じ、何を求めているかを感じ取る必要があるが、生徒にはその必要がないということである。ブーバーは対話的關係において、この相手を感得する能力を重視するが、それは教師にとって大切なトランスパーソナルな能力であると言える。それは教科指導においても生徒指導においても必要なものであり、十分に発揮されなければならないものである。

また、教師の1つの大事な仕事である学級経営において、生徒同士が相手を認め、相互に理解し合い、心を開いてつながり合うよう指導することは重要なことである。それは生徒が潜在的に持つトランスパーソナルな意識を顕在化することなのである。P.フェルッチは「子どもや生徒の中にトランスパーソナル・セルフの存在を認めることは、その人の中に価値ある全てのものに命を与えることを意味する。本当の意味での教育とは、人がトランスパーソナル・セルフへの道を歩むのを助けることなのである」¹⁹⁾と言う。

教師の生徒への愛において大切なことは、それが条件付きの愛ではないということである。E.スタウファーは、トランスパーソナル・セルフの愛は無条件の愛であると言う。

「それなりの事をしてほしいと要求すること、つまり彼はこうすべきだとか、彼女はああしなければならないなどは、条件付きの愛であり、」²⁰⁾ 本当の愛ではないと言うのである。教師が規則や指示に従わない生徒に対して、厳しく指導することは必要なことであるが、しかし教師はそのような条件にそぐわない生徒に対しても、愛を持つべきであるということである。これはキリスト教でアガペと言われる普遍的な愛と本質的に同じものであると言えよう。

まとめ

現代の学校のおかれた厳しい状況の中において、教師が自分の精神的健康を保ち、また、精神的成長を図ることは大切なことである。本稿ではアサジョーリのサイコシンセシスの理論を検討することを通して、特に生徒との關係における教師のあり方を考察した。パーソナルサイコシンセシスの課題は、人間の精神諸機能を、個人的自己の中核である意志によって統合し、自己を確立し、パーソナル・セルフの自己実現を図ることであった。また、トランスパーソナルサイコシンセシスの課題は、高次の自己の中核である愛によって、存在するすべてのものと結びつき、生きることの意義を自覚し、トランスパーソナル・セルフの自己実現を図ることであった。そしてサイコシンセシスの目標は、後者が前者を包摂しながら、人間の精神を拡大し深化させ、人間を精神的により高度に発達させることであった。

教師がこのサイコシンセシスの目標に向かって努力することは、本人の精神的成長のためだけでなく、それは生徒に対しても教育的に良い影響を与えると考えられるし、また、教師相互のより良い關係をつくり、学校における教育活動に不可欠な、教師同士の協力關係を強化するためにも大切なことであると考えられる。ただし、ここではサイコシンセシスの

理論的側面にしか言及できなかったが、その主な実践的方法として瞑想、呼吸法、イメージ訓練などがあることを指摘しておく。

註

- 1) 公立学校教員の病気休職者数に対する、精神性疾患による休職者数の割合は、平成5年度33.1%・平成10年度39.2%・平成15年度53.1%と年毎に増加している(文部科学省：学校基本調査報告書、平成15年)。
- 2) 平成15年度の20歳代の全死亡者数に対する各死因別の割合は以下の通りである。自殺：39.1%・不慮の事故：23.5%・病气：21.2%・交通事故：16.2%(厚生労働省：人口動態年報、平成15年)。

引用文献

- 1) R.アサジョーリ：国谷・平松共訳、「サイコシンセシス」, 誠信書房, 43-44頁(1997)
- 2) R.アサジョーリ：国谷・平松共訳、「意志のはたらき」, 誠信書房, 257-258頁(1990)
- 3) 前掲書1), 31頁
- 4) D.ホイットモア：手塚郁恵訳, 「喜びの教育」, 春秋社, 228頁(1990)
- 5) J. P.ミラー：吉田敦彦他訳, 「ホリスティック教育」, 春秋社, 287頁(1995)
- 6) C. R.ロージャス：伊東 博訳, 「人間中心の教師」, 岩崎学術出版社, 8頁(1984)
- 7) J.ギュスドルフ：小倉・高橋共訳, 「何のための教師」, みすず書房, 250頁(1972)
- 8) 前掲書1), 23頁
- 9) 同上書, 73頁
- 10) 同上書, 34頁
- 11) P.フェルッチ：平松・手塚共訳, 「人間性の最高表現(下)」, 誠信書房, 230頁(1999)
- 12) J.クリシュナムーティ：根木・山口共訳, 「自我の終焉」, 篠崎書林, 438頁(1983)
- 13) 前掲書4), 438頁
- 14) 前掲書5), 19頁
- 15) A. H.マスロー：佐藤三郎他訳, 「創造の人間」, 誠信書房, 83頁(1976)
- 16) J.クリシュナムーティ：菊川・杉山共訳, 「道徳教育を超えて」, 151頁(1977)
- 17) B. K.ウエインホールド・L. C.エリオット：手塚郁恵訳, 「ホリスティック・コミュニケーション」, 春秋社, 22頁(1996)
- 18) M.ブーバー：山本誠作他訳, 「ブーバー著作集8」, みすず書房, 30頁(1970)
- 19) 前掲書10), 213頁
- 20) E. R.スタウファー：国谷・平松共訳, 「無条件の愛とゆるし」, 誠信書房, 152頁(1990)
(受理 2005年2月28日)